心奥探訪

～ピアノ少女が辿り着いた「自分の型」～

7月某日

彼女は大きなリュックを携えてやってきた。

「この中にはハンドメイドのアクセサリーが入ってるんです。」

取り出したボックスの中には小さなアクセサリーの数々。

本職は営業、その傍らにハンドメイドアクセサリーやカードセラピーを行なっている。

一見すると脈絡がないような活動。

けれどそこには彼女が辿り着いた大切な“こだわり”があった。

娘が三人、離婚も経験している彼女から悲壮の色は見えない。

むしろやりたいこと、夢中になれることに取り組んでいる姿からは穏やかながら力強いエネルギーを感じる。

「子供の頃はピアノの先生になりたくて、音大にも行こうと思ったんですけど、親に反対されちゃって。
クラシックを聞くことが多かったんですけど、反対された後はその反動かロックに行きました。
それもボーカルで。」

穏やかな印象からはロックバンドのボーカルをしていた姿が想像できない。
彼女の強さはきっと外から見えるものではなく、心のうちに秘めたものに違いない。
『こだわりや想いが強そうに見えるんですが、昔からですか？』

「強そうに見えますか？全然そんなこと無いです。
すごく自分を見失っていた時期もありますし、何のためにしているのかわからなくなった時もあります。」

彼女は笑いながら、当時を振り返る。
「営業の仕事が向いているのかわからなかったし、ハンドメイドだってただの趣味として続ける意味ってあるのかな？
なんて思ってました。でも子供のためにも働かないといけないし、音楽が好きだったこともずっと忘れて・・・
いえ、思い出さないように蓋をしていましたね。」

親からの反対で閉ざされた音楽への道。
その後ロックに行くも、より強い反対にあった。
未練のまま残ったその想いを忘れることで、蓋をすることで、なんとか生きてきたという。
離婚をきっかけに少しずつ音楽に触れることも増え、

改めて自分の好きなことはなんなのか？
私は何がしたいのか？
自分の軸はどこにあるのか？
を考えはじめたという。

「営業の中ではトレーナーとか指導する業務が好きだったし、カードセラピーをして相手の人の悩んでたことが気づく瞬間とか、ハンドメイド作ってる時なんかはずっとそのことだけに夢中になれるんです。」

そうして自分の好きを見つめた先に出てきたのが子供の頃に蓋をしたままの「音楽」だった。
大好きだったピアノ。

「鍵盤を弾いてて勝手に動き出す瞬間があるんですよ。
頭の中にスコアが流れてきて、そのスコアが風景とか情景とかに変わる瞬間、その時手が勝手に動き出す。
その瞬間が一番気持ちいい。」

彼女曰く、初めはスコア通りに弾くことを徹底される。
そこが出来上がった後に感情をのせ情景を思い描き、演奏をする。
その時にミスがあっても相手にミスと思わせないのがまさしくプロ。

それはまるで日本の伝統文化の”守破離”のようだ。

徹底して基礎を守り、自分なりに改善し、自分のやり方に至る。
そうして出来た「自分の型」
その瞬間こそ彼女にとっての喜びであり幸福だったのだ。

「自分の人生をスコアだとした時、自分の型をみつけることってすごく大事だと思うんです。
ただ楽譜通り弾けばいいわけじゃない。そこに感情をどれだけ乗せて、演奏するか。
じゃないと相手になんの情景も届けることが出来ない」

だからこそ彼女は"自分の型"を必死で探したのだ。
もがきながら、悩みながら、迷いながら。
それこそが彼女の強さでもあるだろう、こだわりがなければ自分の型なんて探さない。

「自分のこだわりがわからない時はこだわりがある人にすごく憧れました。
こだわりというか信念みたいなものを持っている人たち。
その人たちに憧れる気持ちが強くなるほど、自分が何もない気がして。」

信念というと少し仰々しいかもしれない。
しかし"周りから見た"その人の信念とは普段自然とやってしまっていることであることも多い。
彼女の普段からしていることはなんなのだろうか？

きっとそれこそが彼女の持つ信念であり、こだわりであり、強さでもある。

「私は相手のこだわりを鮮明化させることにこだわりを持ってるの。」

ハンドメイドは相手の本当に欲しい形を鮮明にしていく
カードセラピーは悩みや迷いを鮮明にしていく
営業だって指導だってまずはわからないことを鮮明にしていく
そうして成長や解決へと導いていく。

彼女の根底に流れるピアノの音色。
その旋律が目の前の人の霧を晴らし歩む道を鮮明に浮かび上がらせる。
彼女が見つけた「自分の型」
彼女が描く風景は如何なるものか。
今日も彼女は誰かのこだわりを鮮明にして、前へ進む。